

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Perspectives for Research Using the monitor version of the Corpus of Everyday Japanese Conversation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小磯, 花絵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002591

『日本語日常会話コーパス』モニター公開版：研究の可能性

小磯花絵* (国立国語研究所音声言語研究領域)

Perspectives for Research Using the monitor version of the *Corpus of Everyday Japanese Conversation*

Hanae Koiso (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本発表では『日本語日常会話コーパス』(CEJC)モニター公開版を用いることでどのような研究の可能性が開けるかを、コーパスを用いた予備的分析を通して具体的に示す。プロジェクトの開始時点では、国語研究所コーパス開発センターが提供するコーパスは書き言葉に集中しており、話し言葉については独話を主対象とする『日本語話し言葉コーパス』のみであった。日常会話を対象とする CEJC のモニター公開により、書き言葉・話し言葉を含む多様なレジスターを対象に、言葉の使用傾向を多角的に捉えることができるようになった。このことを、並列節を導く接続助詞や縮約の分析を通して具体的に示す。また CEJC が多様な話者・多様な会話を収録していることによって、話者の年齢、場面、聞き手との関係性などが言葉の選択に与える影響の分析が可能となった。この点を丁寧体・普通体の分析を通して示す。

1. はじめに

国立国語研究所「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」プロジェクトでは、多様な話者による多様な場面の日常会話を集めた『日本語日常会話コーパス』(*Corpus of Everyday Japanese Conversation*, CEJC)の構築を進めている。200時間の会話を収めたコーパスを2021年度末に公開する予定であるが、コーパスの利用可能性などを探るために、200時間のうち50時間のデータを対象に2018年12月にモニター公開を開始した⁽¹⁾。

プロジェクトが開始した2016年の時点では、国語研究所コーパス開発センターが提供するコーパスは書き言葉に集中しており、話し言葉については独話を主対象とする『日本語話し言葉コーパス』のみであった。しかし日常会話を対象とする CEJC の公開により、書き言葉・話し言葉を含む多様なレジスターを対象に、言葉の使用傾向を多角的に捉えることができるようになった。そこで本稿ではまず、並列節を導く接続助詞や縮約の分析を通して、書き言葉・話し言葉を含む多様なレジスターを対象とするコーパスベースの研究の可能性について考える。また CEJC は、多様な話者による多様な場面の会話をバランスよく集めることを目標に掲げている。そこで、話者の年齢、場面、聞き手との関係性などが言葉の選択に与える影響の分析が可能となることを、丁寧体・普通体の分析を通して示す。

* koiso@ninjal.ac.jp

⁽¹⁾ www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor.html

2. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の概要

CEJC は、多様な話者による多様な場面の会話をバランスよく集めるために、年齢と性別の観点からバランスをとった 40 名の協力者（男女 × 20 代・30 代・40 代・50 代・60 代以上 × 各 4 名）に収録を依頼し、できるだけ多様な場面の会話を収録してもらうという方法を採用している。モニター公開版はこのうち、表 1 に示す 20 名の協力者のデータの中から、一人平均 2.5 時間、計 50 時間の会話を取り上げて公開している。モニター公開版に含まれる会話の話者数は、延べ 392 名、異なり 237 名である。

表 2 に、モニター公開版に含まれる会話の形式、話者数、活動、場所の内訳（セッション数・会話時間）を示す。表から分かるように、CEJC は雑談だけを扱っているわけではなく、できるだけ用談相談や会議会合も含めるようにしている。また話者数は会話の展開や構造にも影響することから、話者数も偏らないよう配慮している。活動と場所を見ると、収録のしやすさから、自宅や飲食店などの商業施設における食事や私的活動（友人などとの付き合いなど）中の会話が多くなっているものの、職場での仕事や車での移動中の会話なども含まれていることが分かる。CEJC 全体の設計については小磯ほか (2017) を、モニター公開版の詳細については小磯ほか (2019a,b) を参照されたい。

表 1 協力者の属性、対象とする収録セッション数（セ数）・会話数・会話時間・語数

年代	男性				女性					
	職業	セ数	会話数	時間	語数	職業	セ数	会話数	時間	語数
20代	大学生	5	5	2.2h	34,216	大学生	7	7	2.6h	31,645
	大学院生	5	5	2.5h	33,870	大学生	5	10	2.6h	23,817
30代	自営業・自由業	4	4	2.8h	29,296	会社員・公務員等	5	6	2.7h	28,526
	会社員・公務員等	6	6	2.1h	31,239	専業主婦	7	7	2.8h	35,887
40代	会社員・公務員等	4	5	2.1h	23,081	会社員・公務員等	5	5	2.6h	27,193
	自営業・自由業	6	6	2.4h	27,523	パートタイム	6	6	2.6h	33,408
50代	会社員・公務員等	7	7	2.4h	26,750	パートタイム	6	6	2.6h	31,709
	会社員・公務員等	4	4	2.6h	25,140	会社員・公務員等	7	7	2.2h	22,825
60代以上	その他	9	9	2.1h	28,850	自営業・自由業	6	6	2.7h	32,303
	定年退職	6	8	3.0h	47,321	専業主婦	6	7	2.7h	34,728
計		56	59	24.2h	307,286		60	67	26.1h	302,041
						総計	116	126	50.3h	609,327

表 2 会話形式・話者数・活動・場所の内訳

■ 会話形式	セッション数	会話時間	■ 話者数	セッション数	会話時間
雑談	84	36.0 時間	2 人	44	19.3 時間
用談相談	23	11.3 時間	3 人	31	13.9 時間
会議会合	9	3.0 時間	4 人	21	8.6 時間
■ 活動			5 人以上	20	8.5 時間
家事雑事	14	7.6 時間	■ 場所		
仕事学業	14	5.7 時間	自宅	28	12.7 時間
食事	44	18.9 時間	職場学校	16	6.1 時間
私的活動	40	17.1 時間	公共施設	48	20.6 時間
社会参加	11	4.4 時間	その他の室内	15	6.9 時間
移動	7	3.1 時間	屋外	5	1.9 時間
休息ほか	15	5.9 時間	交通機関	4	2.1 時間

3. 研究の可能性

3.1 複数のコーパスに基づくレジスター間の比較

1節で言及したように、本プロジェクトが開始した2016年当時、国語研究所コーパス開発センターでは、新聞や雑誌、ブログなど、多様なレジスターの書き言葉をバランスよく集めた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)や、講演を中心とする『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)など、大規模なコーパスを構築・公開しており、オンライン検索システム「中納言」で比較的容易に研究に利用できる環境が整っていた。しかし日常会話を対象とするコーパスは存在しておらず、日常会話の言葉を書き言葉や講演などと比較し研究できる環境作りが望まれていた。2018年12月にCEJCをモニター公開したことによって、多様なレジスターの言葉を、同一の言語単位・品詞体系のもとに整備されたコーパスを使って容易に比較することができるようになった。そこで本節では、CEJCモニター公開版、BCCWJ、CSJを活用し、並列節を導く接続助詞と縮約の事例を題材に、書き言葉や講演などと比較して日常会話の言葉の特徴を描き出す。

3.1.1 分析データ

分析には、BCCWJ、CSJのうち、人手修正された精度の高い短単位情報が提供しているコアと呼ばれるデータセットを用いた。BCCWJについては、コアのうち、「白書」「新聞」「雑誌」「ブログ」の四つのレジスターを、CSJについては、コアのうち「学会講演」「模擬講演」の二つのレジスターを分析対象とした。これらにCEJCモニター公開版の「日常会話」を加え、合計七つのレジスターを比較した。これらのレジスターを取り上げたのは、できるだけ多様なスタイルの書き言葉・話し言葉を比較するためである。小磯ほか(2008)、小磯(2012)などの分析から、全体的に白書は新聞よりもより硬く改まった文体であることが分かっている。BCCWJが対象とする新聞のサンプルには、いわゆる記事のほかにも社説やコラムなども含まれており、また記事においても白書と比べて発言の引用が多いことなどが影響していると考えられる。雑誌のサンプルは硬い文体を主とする経済誌から軟らかい文体を基調とするファッション誌まで幅広いスタイルの文章が含まれている。ブログのようなインターネット上の言葉は話し言葉に近いことも指摘されている(三宅2005)。またCSJに付与されている印象評定データの結果から、学会発表などを中心とする学会講演よりも、一般の話者による個人的な体験談などを集めた模擬講演の方が、発話スタイルが低いことが指摘されている(籠宮ほか2007)。CEJCが対象とする日常会話は学会講演や模擬講演のようなスピーチよりも発話スタイルは低いことが予想される。こうしたことを念頭に、このあとの分析結果を見ていきたい。

3.1.2 並列節を導く接続助詞「が」／「けれども」類の出現傾向

本節では、並列節を導く接続助詞「が」と「けれども」を取り上げ、レジスター間でその出現傾向を比較する。接続助詞の「が」と「けれども」は用法が極めて類似しているが、「が」は書き言葉で、「けれども」は話し言葉で多く用いられる傾向にあることが指摘されている(森田2007:312)。多様なレジスターの書き言葉・話し言葉の中で「が」と「けれども」がどのような比率で出現するかを、コーパスに基づく分析を通して具体的に見ていく。また「けれども」

表3 レジスターごとに見た接続助詞「が」と「けれども」類の調整頻度（100万語あたり）

	が	けれども類	けれども類の内訳			
			けれども	けれど	けども	けど
白書	1051	5	0	5	0	0
新聞	2668	107	3	29	0	75
雑誌	3199	732	10	163	0	559
ブログ	4690	2318	32	259	0	2027
学会講演	5397	2927	2008	60	591	267
模擬講演	3269	9207	3926	230	1763	3175
日常会話	118	6632	80	99	130	6323

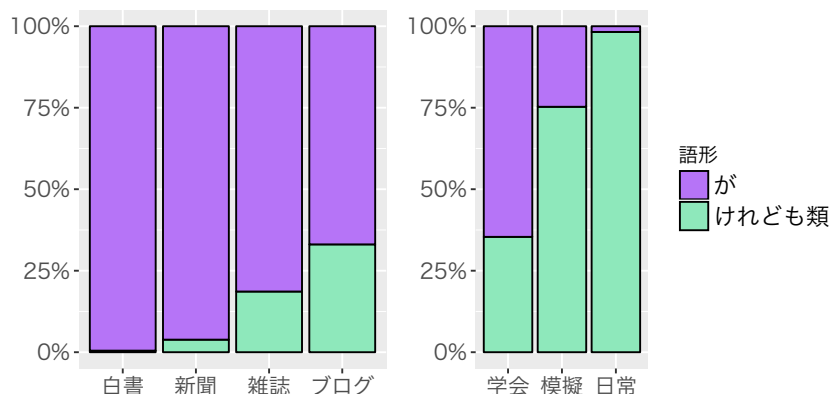


図1 レジスターごとに見た接続助詞「けれども」類と「が」の出現率

には「けれど」「けども」「けど」などの語形のバリエーションがあるため、こうした語形の選択とレジスターとの関係についても検討する。なお本節では、「けれども」「けれど」「けども」「けど」という四つの語形をまとめて「けれども」類と称す。

レジスター毎に接続助詞「が」と「けれども」類の頻度を求め、比率を求めた。結果を表3と図1に示す。図から、総じて書き言葉では「が」が、話し言葉では「けれども」類が多く用いられているが、書き言葉であっても軟らかいスタイルになるにつれ「けれども」類が、逆に話し言葉であってもよりスタイルが高くなるにつれ「が」が多く用いられる傾向が読みとれる。丸山(2014a)は、CSJを用いた分析を通して、学会講演では模擬講演よりも「が」が多く、逆に「けれども」類は少ないことから、改まったスタイルでは「が」がより好まれることを指摘している。今回の分析から、丸山の指摘する傾向が、白書のような硬いスタイルの書き言葉から日常会話のようなくだけた話し言葉までの幅広いレジスターにおいて明瞭に観察されることが分かる。分析対象とした書き言葉の中で最も硬い文体と考えられる白書ではほぼ「が」しか用いられないのに対し、最もスタイルの低いと考えられる日常会話では逆にほぼ「けれども」しか用いられていない点も興味深い。CEJCをモニター公開することによって、まさに多様なスタイルの言葉をコーパスに基づき分析できる環境が整ったと言える。

次に「けれども」類の語形の内訳を見る。結果を図2に示す。白書は「けれども」類が1例しか出現しなかったため図から省いた。丸山(2014b)は、CSJにおいて学会講演より模擬講演の方が「けど」が多いことから、話し言葉では改まったスタイルからくだけたスタイルに移行

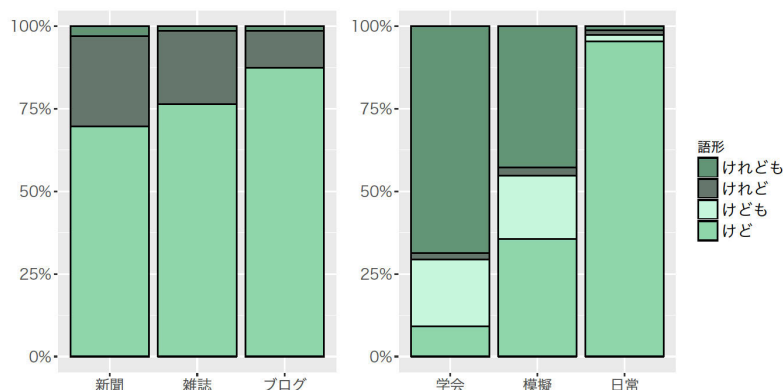


図2 レジスターごとに見た「けれども」「けれど」「けれども」「けど」の出現率

表4 「が」のみ用いるサンプル、「けれども」類を用いるサンプルの数とその割合

レジスター	サンプル数	「が」のみを用いる サンプルの数・割合	「けれども」類が出現する サンプルの数・割合
白書	48	47 (98%)	1 (2%)
新聞	297	271 (91%)	26 (9%)
雑誌	81	48 (59%)	33 (41%)
ブログ	248	139 (56%)	109 (44%)
学会講演	70	16 (23%)	54 (77%)
模擬講演	107	1 (1%)	106 (99%)
日常会話	125	0 (0%)	125 (100%)

するにつれ「けど」が多くなることを指摘している。図から、日常会話では「けど」の使用率が95%を越えており、この傾向が極めて強く現れていることが分かる。

また丸山(2014b)は、ブログなどのくだけたスタイルで書かれた書き言葉では「けど」の使用が極めて多いことも指摘している。図2を見ると、ブログだけでなく新聞や雑誌についても「けど」の使用率が高く、また「けれども」はほとんど用いられていないことが分かる。この点は「けれども」を多用し「けど」の使用が抑制される学会講演や模擬講演と対照的である。

表4に示すように、もともと書き言葉では「が」のみを用いるサンプルが多く、「けれども」類を1例でも用いているのは、新聞では全体の9%、雑誌やブログでも40%強と、80%弱を占める学会講演やほぼ100%の模擬講演・日常会話と比べてかなり少ないことが分かる。高いスタイルの文章では「が」を用いればよく、わざわざ「けれども」を用いる必要はない。「けれども」類を用いるような書き言葉のサンプルは、新聞で言えば以下の例のように発言の引用やコラム(書評)などであり、話し言葉らしさやくだけた調子で語りかけるスタイルの実現に貢献している。

7. 5キロのコースで行われたバイアスロン。連覇はならず、二十七分五十六秒06の記録で6位。しかし、小林深雪の表情は明るかった。「後半はばてたけど、前半はスキーをうまく滑らせることができました」。(sampleID:PN2c_00009・読売新聞)

夫の宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスもそうとう興味深い人物だが、その妻マグダの成り上がり人生はそのまま一編のあくどいハーレクイン・ロマンスで、みづから六人の子どもたちを道づれにする最期はギリシャ悲劇のようだ(?)。私はこの本で初めて知ったの**だけど**、ヒトラーの姪ゲリ・ラウバルの話、それからイギリスのナチ少女ユニティ・ミットフォードの話も読みごたえがあった。(sampleID:PN2a_00014・朝日新聞)

丸山 (2014b) はまた、書き言葉では「けども」より「けれど」がより多く用いられるのに対し、話し言葉では逆に「けれど」より「けども」の方がはるかに多く用いられていることを指摘しており、その傾向が図 2 から読みとれる。この点については次の先行研究の指摘とあわせて考えたい。

宮内 (2007) は、江戸後期・明治期の文学作品における会話文を対象とした調査から、江戸後期の資料では「が」が多いが「けれども」類も見られるようになったこと、その際「けど」は見られず「けれど」が多く現れること、更に明治期になってから「けど」が散見されるようになったことを指摘している。また調査した対象の中に「けども」は見られなかったとしている。また土井 (1969) は、明治期と比べ大正期以降においては、口頭語で「けれど」より「けど」の使用が優勢になったこと、更に口頭語で「けども」はわずかに散見されるのみであり、また「けれども」を口頭語で用いることはすたれたことを指摘している。これらの先行研究に、BCCWJ や CSJ, CEJC を用いた本調査結果を合わせることで、けれども類について次のような傾向が見えてくる。

けど 江戸後期には見られなかったが、明治期に散見されるようになる。大正期以降はそれまで多く用いられていた「けれど」にかわり優勢になり、遅くとも平成期の日常会話では「けど」の使用が圧倒的に用いられるようになる。ただし学会講演のようなスタイルの高い話し言葉ではその使用は抑制される。

けれど 江戸後期や明治期では多く見られたが、大正期以降は「けど」に押されて少なくなり、平成期ではスタイルの高低に関わらず話し言葉で用いられることはあまりない。一方、書き言葉ではこの語形が残っている。

けども 江戸後期には見られなかったが、大正期ごろから徐々に散見されるようになり、平成期ではスタイルの高さに関わらず「けれど」より多く用いられる。一方、書き言葉ではこの語形はあまり用いられない。

けれども 江戸後期から見られるが、大正期以降において口頭語で用いられることは少なくなった。ただし平成期においても講演などのスタイルの高い話し言葉では用いられる。一方、スタイルの高い書き言葉では「が」が好まれるため、書き言葉で「けれども」が用いられることは少ない。

「日常会話コーパス」プロジェクトでは、1950年代から1970年代にかけて国立国語研究所で録音された独話と会話を集めた『昭和話し言葉コーパス』の構築を進めており(丸山 2016)、そのうち17時間分の独話データについて2019年3月にモニター公開を開始したところである。今後、会話データの整備が進めば、昭和期から平成期にかけての「けれども」類の変遷について、講演・日常会話の両面から捉えることが可能となるだろう。

3.1.3 縮約「てしまう」／「ちゃう」・「て行く」／「てく」の出現傾向

本節では、縮約のうち、接続助詞「て/で」+動詞「しまう」が「ちゃう/じゃう」（例：見てしまう→見ちゃう）と、接続助詞「て/で」+動詞「行く」が「てく/でく」（例：見て行く→見てく）となる事例を取り上げ、その傾向を前節と同じようにレジスター毎に比較する。結果を表5と図3・4に示す。

図3から、「てしまう」とその縮約形「ちゃう」は、先に見た「が」と「けれども」類の分布に近いことが分かる。書き言葉では、新聞・雑誌・ブログの順に縮約形が多くなり、特にプロ

表5 レジスターごとに見た「てしまう/ちゃう」・「て行く/てく」の調整頻度（100万語あたり）

	てしまう	ちゃう	て行く	てく
白書	61	0	731	0
新聞	305	10	473	0
雑誌	816	252	969	0
ブログ	1175	712	927	43
学会	730	138	1357	92
模擬	1546	924	1088	378
日常	125	3212	330	510

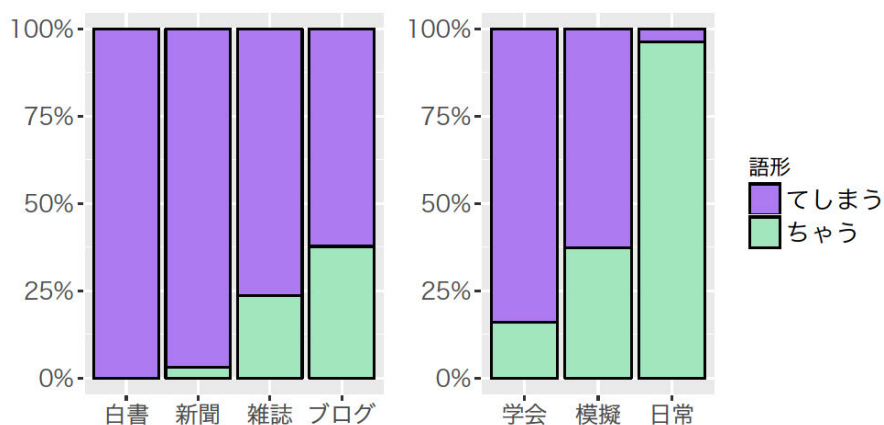


図3 レジスターごとに見た「てしまう」とその縮約形「ちゃう」の出現率

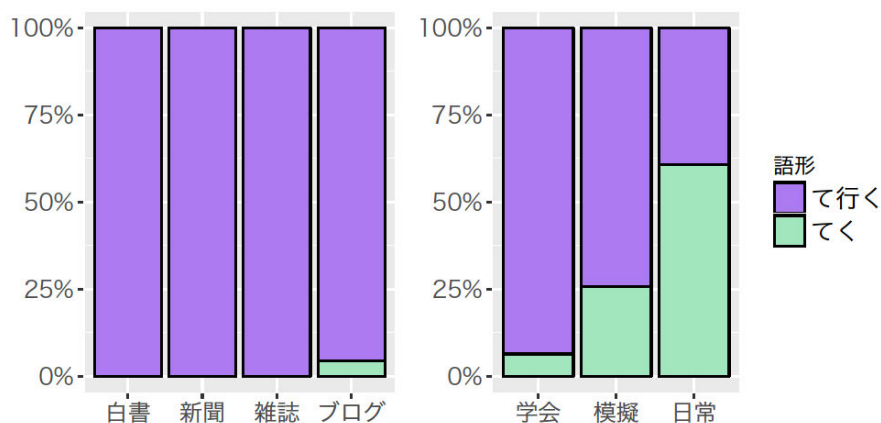


図4 レジスターごとに見た「て行く」とその縮約形「てく」の出現率

グでは4割弱を縮約形が占めている。話し言葉でも学会講演・模擬講演・日常会話の順に縮約形が多くなり、日常会話では96%が縮約形である。一方、図4から分かるように、「て行く」の縮約形「てく」については、話し言葉では「ちゃう」ほどではないが学会講演・模擬講演・日常会話の順に縮約形が多くなり日常会話では61%を占めるのに対し、書き言葉ではブログで4%出現するのみであり、この点において「けれども」類や縮約形「ちゃう」とは異なる傾向を示している。つまり、縮約形「ちゃう」は、「けれども」類（特に「けど」）と同様、書き言葉において話し言葉らしさやくだけた調子で語りかけるスタイルを作るために用いられやすいが、縮約形「てく」はこうした使用のされ方は少ないと考えられる。縮約形のような口語的な表現の中には、書き言葉でも話し言葉らしさやくだけた調子の表出のために用いられるものと、あまり用いられないものがあることが予想される。今後、コーパスを用いてこうした調査を進めていく必要がある。

3.2 相手や場面などに応じたことばの使い分け：丁寧体・普通体を例に

2節で見たように、CEJCは多様な話者・多様な場面の会話を対象とすることから、会話の相手や場面などに応じたことばの使い分けを分析するのに適したコーパスであると考えられる。そこで本節では、丁寧体・普通体の使い分けを例に、CEJCモニター公開版を用いた分析の例を示す。

分析対象とするのは、CEJCモニター公開版のうち、述語を動詞・形容詞とする発話で、従属節で終わる中途発話文は分析から除いた。また相手との関係性が自動で一意に特定できる話者の発話を対象とした。例えば、母親と2人の子供の会話の場合、母親の発話は必ず子供に向けた発話であるため分析対象とするが、子供の発話は母親の場合もあれば兄弟の場合もあるため対象外とする。結果、92会話に含まれる18,588発話、延べ話者数249名のデータを分析対象とした。

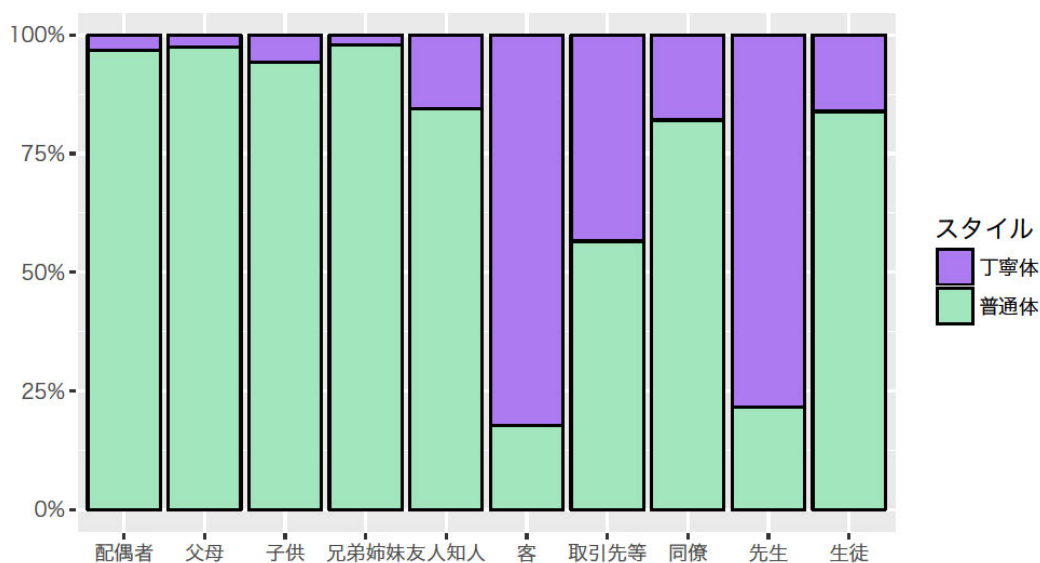


図5 聞き手の関係性ごとに見た丁寧体・普通体の出現率

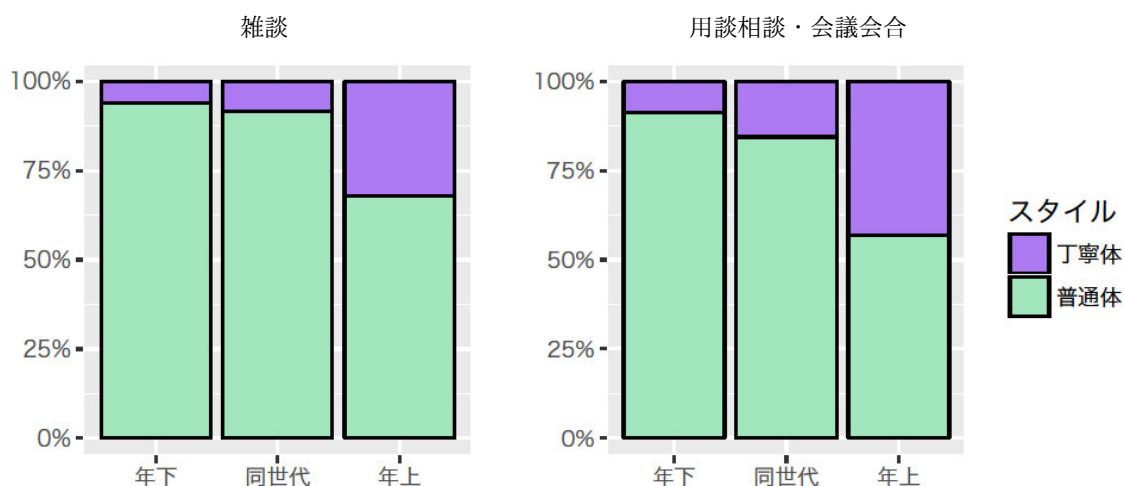


図6 会話形式・上下関係ごとに見た丁寧体・普通体の出現率

図5に、話し手から見た聞き手の関係性ごとに丁寧体・普通体の出現率を示す。図から、相手が配偶者や父母、子供、兄弟姉妹などの家族に対してはほぼ普通体しか用いないのに対し、客や先生の場合には高い確率で丁寧体を用いていることが分かる。

一方、友人知人については、丁寧体の使用率が10%未満の話者が半数を占めるが、丁寧体使用率の分散が大きく、丁寧体・普通体の選択にその他の要因が影響している可能性がある。そこで会話の相手が友人知人の場合に限定し、会話の形式として雑談と用談相談・会議会合に分けた上で、上下関係別に丁寧体・普通体の出現率を調べた。結果を図6に示す。図から、いずれの会話形式においても、相手が年下の場合よりも同世代の方が、また同世代の場合よりも年上の方がより丁寧体を多く用いていることが分かる。またどの関係においても、雑談より用談相談・会議会合の方が丁寧体を多く用いている。

丁寧体・普通体の使い分けは、これまでも条件を統制したデータを用いた研究の蓄積があるが、作られた環境での会話ではなく、まさに日常場面で我々がどのように言葉を使い分けているかを、コーパスを用いて定量的に明らかにできるという点は重要である。CEJC モニター公開版には、自宅での家族との会話や飲食店での友人との会話、職場での同僚との会合、学校での同級生との雑談など、多様な場面における多様な話者との会話が収められているからこそ、こうした分析が可能になったと言えよう。

4. おわりに

本稿では、CEJC モニター公開版を用いることで、どのような研究の可能性が開けるかを、コーパスを用いた予備的分析を通して具体的に示した。2021年度末に200時間の会話を対象とする本公開を予定しているが、データ量が4倍になることで、分析の可能性が更に広がることが期待される。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的
研究」によるものである。コーパスの収録にご協力・ご参加くださった皆さまに感謝します。

文 献

- 小磯花絵・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉
(2017). 「『日本語日常会話コーパス』の構築」 言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集,
pp. 775–778.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康
晴・西川賢哉 (2019a). 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴」 言語処
理学会第 25 回年次大会発表論文集, pp. 367–370. [https://www.anlp.jp/proceedings/
annual_meeting/2019/pdf_dir/P1-16.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2019/pdf_dir/P1-16.pdf)
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・
伝康晴・西川賢哉 (2019b). 『プロジェクト報告書 3 『日本語日常会話コーパス』モニター公
開版コーパスの設計と特徴』
- 小磯花絵・小木曾智信・小椋秀樹・富士池優美・宮内佐夜香 (2008). 「『現代日本語書き言葉均
衡コーパス』にもとづくジャンル間の文体差に関わる要因の分析」 社会言語科学会第 22
回研究大会発表論文集, pp. 192–195.
- 小磯花絵 (2012). 「テキストの多様性をとらえる分類指標—体系化の試み—」 石田基広・金
明哲 (編) 『コーパスとテキストマイニング』 共立出版 pp. 70–82.
- 三宅和子 (2005). 「携帯メールの話しことばと書きことば 電子メディア時代のヴィジュアル・
コミュニケーション」 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰 (編) 『メディアとことば 2 特集組み
込まれるオーディエンス』 ひつじ書房 pp. 234–261.
- 籠宮隆之・山住賢司・楨洋一・前川喜久雄 (2007). 「聴取実験に基づく講演音声の印象評定デー
タの構築とその分析」 社会言語科学, 9:2, pp. 65–76.
- 森田良行 (2007). 『助詞・助動詞の辞典』 東京堂出版.
- 丸山岳彦 (2014a). 「現代日本語の多重的な節連鎖構造について— CSJ と BCCWJ を用いた分
析」 石黒圭・橋本行洋 (編) 『話し言葉と書き言葉の接点』 ひつじ書房 pp. 93–114.
- 丸山岳彦 (2014b). 「現代日本語の連用節とモダリティ形式の分布—BCCWJ に基づく分析—」
益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』
ひつじ書房 pp. 399–425.
- 宮内佐夜香 (2007). 「江戸語・明治期東京語における接続助詞ケレド類の特徴と変化：ガと対
比して」 日本語の研究, 3:4, pp. 1–16.
- 土井洋一 (1969). 「けれども—接続助詞〈現代語〉」 松村明 (編) 『古典語現代語助詞助動詞詳
説』 學燈社 pp. 415–420.
- 丸山岳彦 (2016). 「『昭和話し言葉コーパス』の計画と展望:1950 年代の話し言葉研究小史」 専
修大学人文科学研究所月報, 282, pp. 39–55.